リアリティ・モニタリング・エラー経験と視覚的イメージスタイルとの関連性についての検討

○中田英利子¹・森田泰介²

(¹ 大谷大学・² 東京理科大学理学部第二部)

キーワード：リアリティ・モニタリング・エラー経験、視覚的イメージスタイル、質問紙法

Relationship between reality monitoring error experience and individual differences in visual imagery style

Eriko NAKATA¹ and Taisuke MORITA²

(¹Otani University, ²Faculty of Science, Division 2, Tokyo University of Science)

Key Words: Reality monitoring error experience, Visual imagery style, Questionnaire method

【目 的】

実際に起こった出来事を知覚したことによって外的に獲得された記憶と、自らの思考や想像によって内的に生成された記憶とを区別する認知過程をリアリティ・モニタリング (Reality Monitoring: 以降, RM; Johnson, Hashtroudi, & Lindsay, 1993; 中田, 2008) と呼ぶ。外的に獲得された記憶と内的に生成された記憶とを取り違えてしまうことを、リアリティ・モニタリング・エラー (以降, RM エラー) という。RM エラーに関わる認知特性を検討するために、中田・森田(2012)は RM エラー経験と鮮明な視覚的イメージを体験できる能力との関連性について検討した。その結果、日常生活場面における RM エラー経験を測定できる質問紙 (Reality Monitoring Error Experience Questionnaire: 以降, RMEEQ; 中田・森田, 2014) における視覚的な RM エラー得点と、視覚イメージ鮮明性質問紙 (Vividness of Visual Imagery Questionnaire: 以降, VVIQ; Marks, 1973) の合計得点との間に有意な正の相関が認められた。この結果は、鮮明な視覚的イメージを体験できる能力が高い者ほど、内的に生成された記憶であっても知覚の詳細情報が多く伴うため、RM エラーを犯しやすいと解釈された (e.g., Markham & Hynes, 1993)。

神経心理学的研究、fMRI や PET を用いた脳機能研究、行動的指標を用いたワーキングメモリ研究により、視覚イメージの処理を物体イメージ (object imagery) 処理と空間イメージ (spatial imagery) 処理とに分類できると報告されている (e.g., 川原・松岡, 2004)。前者は個々の物体の形や大きさ、色、明るさについて鮮やかで解像度の高いイメージの想起に関わる処理で、後者は物体間の空間的關係図を描写したり、思い浮かべたイメージを変形したり操作することに関わる処理である。個人の視覚イメージ特性についても物体イメージ特性と空間イメージ特性に分けて捉え直され (e.g., Kozhevnikov, Kosslyn & Shephard, 2005)、個人内でのこれらの処理の優先傾向を測定できる質問紙も開発されている (e.g., Blajenkova, Kozhevnikov, & Motes, 2006)。川原・松岡(2009)は日常生活における物体イメージと空間イメージの使用傾向を測定することができる視覚的イメージスタイル質問紙 (Visual Imagery Style Questionnaire: 以降, VISQ) を開発した。VISQ は物体イメージ尺度 12 項目 (映像的なイメージを思い浮かべながら本を読むことが多い等) と空間イメージ尺度 12 項目 (知らないところと言っても東西南北をあまり間違えない等) の計 24 項目から構成される。

しかしながら、個々の視覚イメージの使用や体験の傾向性と RM エラーとの関連性についてのデータが十分蓄積されているとは言い難い。本研究では、個人内での視覚的イメージの使用傾向と RM エラー経験との関連性について調査的研究を行う。物体イメージ特性が高い者ほど、個々の物体について色鮮やかで解像度の高いイメージが想起できるため、内的に獲得された記憶であっても知覚の詳細情報が多く伴うならば、RM エラーを経験しやすいため、物体イメージ得点と RMEEQ 得点との間に正の相関が認められると予測された。

空間イメージ特性が高い者ほど、物体間の空間的配置等について正確に想像できるとすれば、RM エラーはあまり経験されないため、空間イメージ得点と RMEEQ 得点との間には負の相関が認められると予測された。

【方 法】

調査対象者 大学生 78 名。このうち男性 45 名 (年齢 $M=19$, $SD=1$, 範囲:18-23)、女性 33 名 (年齢 $M=20$, $SD=2$, 範囲:18-25)。

調査用紙 RMEEQ は全 32 項目で、評定値の合計得点から日常生活場面での RM エラー経験 (得意な分野の事柄について、実際に見たこと・聞いたことがないのに、既に見たこと・聞いたことがあると思ひこんだことがある等) の頻度を測定するものである。視覚的イメージの使用傾向を測定するために川原・松岡(2009)により作成された VISQ を使用した。回答の順番は常に RMEEQ, VISQ であった。聴覚イメージ鮮明性質問紙 (菱谷, 2005) も同時に実施したが、本研究とは無関係であるため、以後記述しない。

手続き 心理学の講義中に集団で調査を実施した。RMEEQ への回答は、文章をよく読み、各項目がふだんの自分にどの程度該当するかについて 5 件法 (4: 非常によくある-0: まったくない) によって求めた。VISQ への回答は、文章 1-24 が普段の自分に該当する程度について、当てはまる程度を 5 件法 (5: よく当てはまる-1: 全くあてはまらない) に置き換えて 1 つ〇をつけて回答するように求めた。回答終了後、調査者が全ての調査用紙を回収した。

【結 果】

記入漏れの者がいなかったため、全てのデータを分析対象とした。VISQ の空間イメージスタイル得点と物体イメージスタイル得点との関連性について検討したところ、両者の間に有意な正の相関が認められた ($r=0.33$, $p<.01$)。そのため、VISQ の一方の尺度の影響を統制した場合の VISQ の尺度と、RMEEQ との関連について検討するために、VISQ の片方の尺度得点を制御変数に設定した偏相関分析を行った。空間イメージ尺度の影響を統制し、RM エラー経験と物体イメージ特性との関連性について検討した結果、両者の間に有意な正の相関が認められた ($r=0.33$, $p<.01$)。また、物体イメージ尺度の影響を統制し、RM エラー経験と空間イメージ特性との関連性について検討した結果、両者の間に有意な負の相関が認められた ($r=-0.29$, $p<.01$)。

【考 察】

本研究の結果から、物体イメージの使用傾向が高い者ほど、個々の物体の形や大きさ、色、明るさ等について鮮明で解像度の高いイメージが体験されることにより、内的に獲得された記憶であっても知覚の詳細情報が多く伴うため、RM エラーを経験しやすいと考えられる。空間イメージの使用傾向が高い者ほど、物体の部品間の空間的関連性や配置、物体の動きや変化を正確に情報処理できるため、RM エラー経験が少ないと考えられる。今後は、空間イメージのような外的環境についての正確な情報処理が、RM エラーを防止することができる可能性について更なる検討が求められるだろう。